第三百八十三回　青葉会

平成三十年三月二十二日（木）午后五時半～八時半　文京区民センター

〈選者〉
◎川口孤舟

〈出席者〉
今井紀久男　大林猛　柿崎忠彦　川口孤舟　久米五郎太　小西弘子　在間千恵
豊田ゆたか　中野一灯　星田啓子　山内天牛
伊賀山そらお　小早健介　朱牟田恵洲　土谷堂哉　古田昇　宮内規雄
山崎亜也　山田けい子　渡邊盛雄
赤田堅　安部眞希子　庄司龍平　高橋敏郎　早川允章　福島正明　M・S氏
村田くに子　山本三恵

〈投句〉

〈紙上選句〉

《互選句》

七点
◎枝打の杣一服の銀煙管　一灯（猛・孤・五・弘・ゆ・允・啓）
（紀…見事な句だが、子規や虚子の時代に戻ったような感じする）
◎墨絵めく小雨にけぶる蜆舟　昇（堅・孤・ゆ・灯・敏・允・天）
（紀…実景の写生句と思うが、類句ありそう。避けて別の表現にした方がいいと思う）
直角に進み卒業証書受く　孤舟（眞・忠・弘・敏・灯・天）
（紀…上五がユニークで面白い表現だが、類句ありそうに思う）

五点
◎清元の春呼び寄する声の張り　啓子（紀・忠・孤・五・灯）
（歌舞伎座の清元演奏会。けい子さんの独吟もありました）
◎夜を灯す光集めし白木蓮　仝（孤・五・千・敏・ゆ）

四点
辛夷咲く快癒解禁酒の句座　紀久男（敏・ゆ・允・正）
卒寿の師遂に介護の二月かな　仝（堅・眞・五・正）
◎雛壇は和ダンスの上若夫婦　忠彦（眞・紀・孤・弘）
ひかり咥へて真っ直ぐに落雲雀　孤舟（紀・弘・啓・三）
（紀・弘…上五の表現が素晴しい）
蹠（あうら）より昇る余寒や鶯張り　仝（猛・啓・く・三）
蔵出しの醤油のかをり涅槃西風（川越）　仝（ゆ・允・く・三）
春芝に子供ころころ笑ひ声　弘子（猛・龍・M・天）
仮設舎のテレビの上なる紙の雛　恵洲（紀・ゆ・灯・啓）

三点
◎満願の秩父遍路や兜太逝く　一灯（孤・五・允・三）
春分や乗らぬ車に車検来る　健介（眞・正・天）
老木もつぼみ抱きて春を待つ　千恵（堅・忠・龍）
◎花の雨遠き野山の煙りけり　規雄（孤・五・M）
春一番競馬新聞無重力　盛雄（忠・天・三）

二点
◎開花日を待ちたる如き春嵐　そらお（孤・龍）
喜寿の春茶で乾杯の仲間増ゆ　紀久男（堅・猛）
掌に載せて波へ放ちて磯遊　弘子（五・く）
三年の新聞配達桜咲く　健介（堅・眞）
伸ばす手を止められない雛あられ　千恵（猛・M）
◎割烹着の母の記憶や蜆汁　恵洲（孤・啓）
ペットロス癒えし隣人青き踏む　堂哉（紀・く）
苔むせし老い木今年も花開き　ゆたか（堅・千）
石組の崩れし畦や犬ふぐり　一灯（く・允）
ゆるキャラの雛人形を買はさるる　昇（紀・龍）
梅の香にふとランナーの脚停まる　啓子（千・M）

◎花万朶またも涙の溢れけり　規雄（孤・猛）
眼の強さ王者の如き桜鯛　けい子（紀・忠）
冬五輪「そだね」「そだね」で銀メダル　天牛（眞・千）
ゾーリンゲンのごつい鋏で蟹捌く　仝（M・三）
産土の地下リニアカー地虫出づ　盛雄（紀・灯）
（中津川）
足音はやがて駈あし樹々芽吹く　仝（堅・紀）
風光る畦道たどり蓬摘む　そらお（M）
菊之助初役の髪結新三（国立劇場）
若桜立役（たちやく）兼ねる菊之助　紀久男（正）
いじめ受く孫に元気を桜餅　仝（敏）
初花や去年より早く靖国に　猛（龍）
あたたかいはずの彼岸に雪が舞う　仝（千）
（季重なりだが実景）
春めきてインフルエンザになる油断　忠彦（正）
奔流を宥めすかして初筏　孤舟（龍）
釜ヶ座の町に人なき春の昼　五郎太（紀）
（紀→「春昼や人通りなき釜ヶ座町」）（京都三条ちかく茶釜を作っている町）
醍醐なる伽藍の空の糸桜　仝（く）
残像の青発光す初すみれ　弘子（啓）
乗ってみた回転木馬春の昼　千恵（天）
古稀の日に三年ぶりの風邪に臥す　仝（紀）
足摺の寄する荒波黄水仙　堂哉（敏）
原子炉塔望む岸辺の花一樹　ゆたか（灯）
巣作りの鳥驚かす春の雪　仝（く）
芹洗ふ雫の光振り散らし　一灯（弘）
◎片割れの真珠のカフス春愁ひ　仝（孤）
手折る手に重きミモザの枝ひとつ　啓子（千）
桜鯛透く身の下のシャリ白し　亜也（紀）
春風邪や漢方試み出張す　仝（紀）
音楽が聞こえるよ子のふらここは　けい子（弘）
のし袋きれいなお札ホワイトデー　天牛（紀）
蟇鳴いて妻美容院に予約入れ　仝（正）

一点

●次回青葉会
四月二十六日（木）午后五時半～八時半　文京区民センター
当季雑詠各自五句　投句は二句
五月二十四日（木）井の頭公園吟行　午前十時　象はな子銅像前集合
午后一時三十分～四時　御殿山コミュニティセンターにて句会

平成三十年三月　青葉会報

一　今回は、啓子さんら１１名出席。投句９名。孤舟選者持参の「俳句四季」４月号。小生持参の「俳句あるふぁ」春号及び別冊付録へ「おくのほそ道」を読む）。眞希子さんからの選句ＦＡＸ。小生の「日本リヒテンシュタイン公国友好９９周年記念ピアノコンサート」（３月２０日みなとみらいホール若手音楽家育成アヤメ基金主催）のチラシを回覧し乍ら開始。忠彦さんが用意された軽食（海苔巻と唐揚に餃子）、啓子さんの稲荷鮨、千恵さんの純吟「蓬莱」（飛騨高山）、小生の大吟醸「琵琶の長寿」（近江今津）と「八海山」缶ビール、つまみを賞味しつつ、猛さんの司会で順調に推移。御覧のように、一灯さん、昇さん、孤舟さん、啓子さんが好成績でした。

今回から小生の独断偏見の句評掲載しておりますが、かつての絹漱先生御指導時代の辛口を多分に意識し乍ら発言しております。反論批評歓迎です。万里子先生の選評が期待できなくなりましたので、敢えて発言し掲載した次第です。

二　関係者近詠

大寒の朝焼け仰ぎ米寿かな　万里子
充分に乾く故郷の凍み豆腐　全
抱き上げし白菜の芯の眩しさよ　全
よちよちと残り霜踏み母を追ひ　全
枯蔓を引くや隣家の木戸閉まり　全
黄葉晴象のはな子へ先づ献盃　全
天窓を覗く満月流れ星　全
バイトにて礼拝休むとメール冷ゆ　眞希子
誕生日の自祝と河豚汁ふるまへり　全
ジャンバーに熱の子入れてピアス父　全
冬霞汽笛に弾ける登校児　全
寒燈火寝息へ無言の襁褓替へ　全
道行の足の白さよ近松忌　弘子
砂に足とられて浜のどんとへと　全
掃き寄せて落花の湿りひめつばき　全
今ここに生きて弾ませ竜の玉　全
頽れむこころをされど去年今年　青史
妻にちからの満てよ溢れよ大旦　全
初風呂は虚ろなりけり孤りなり　全
初夢の妻の健脚能登の旅　全

―「森の座」４月号

擦れ違う人の溜息春の宵　正明
御町内更地又増え花の雨　全
初蝶や若葉マークを付けてをり　全
麗らかや百寿の母と暮らす日々　堂哉
春疾風蛤御門の弾の痕　全

学寮や書物に倦みて春の星　規雄

―「ＮＨＫ俳句」４月号　高柳克弘選

風花や輪郭著き甲斐の山　恵洲

―「ＮＨＫ俳句」４月号　西村和子選

山寺は花の月夜となりにけり　孤舟
初燕摩文仁の丘に風を聴く　全
陽炎や高く上げたる象の鼻　全
木落しの氏子も零し御柱祭　全
初蝶と乗る一湾のたらい舟　全
村じゅうの空を奪ひ合ひ桃の花　全
将棋倒しにレガッタの櫂揃ふ　全
櫂を挿す一寸法師花筏　全

―「俳句四季」４月号（四月の季語）

竜天に吾の心奥に悟朗生く　盛雄
鳥帰るタウン誌いよよ終刊か　全

（芦屋・神戸の高齢者向け倶楽部誌）

春眠や満十三年の事故の夢　健介
長江の春旅別れに「夜来香」　紀久男
みさご舞ひ生醤油匂ふ湯浅かな　全

―「きさらぎ句会」３月

春潮に乗る船の灯の迅さかな　允章
黒潮のうねりはるかに島椿　全
沈丁の瞬くやうにひらきをり　全

三　３月２４日の日経俳壇の黒田杏子選は全１２句共金子兜太追悼句です。上位３句と下位１句をご紹介します。

●梅月夜青鮫率い兜太行く　千葉　谷川進治
●兜太逝く春反戦句吾も詠まむ　長野　寺島　渉
●存在の巨星兜太の逝く二月　京都　饗庭　洋
●兜太いま秩父の春の雲となり　吹田　柏原才子（きさらぎ句会出身）

―一灯さんの四点句は右の四句に引けを取らない好句と思います。

以上　紀久男記

平成三十年年四月七日

平成30年 青葉会 吉例